

トッポ インタビュー

再生可能エネルギーによる発電事業を通じて
地域社会の継続的持続的発展に貢献します」

株式会社 インテグリティエナジー

代表取締役 北角 強 氏

所在地 枚方市三栗1-28-75
事業内容 再生可能エネルギーに関わる
コンサルティング業
設立年月日 2011年10月17日



松阪木質バイオマス発電所プラント

☆会社を起業した経緯

私は香川県高松市の出身でして、故郷の香川県立高松高校から慶応義塾大学を経て、ソフトウェア設計開発会社に就職した後、企業向けシステムエンジニアとして約12年間勤めました。本格的にパソコンが出まわる前の大型コンピューターがメインの時代でしたので、銀行、製造業の現場に足を運び各々の環境に応じたシステムをオーダーメイドで作っていました。死ぬほど(笑)コンピュータープログラムを作っていましたので、その時の経験やITに関する知識は現在の仕事に生かされています。

そのような中、1997年に採択された気候変動枠組に関する国際条約である「京都議定書」について調べる機会がありました。「京都議定書」とは、地球温暖化対策のために国際社会が初めて法的拘束力を持って温室効果ガスの削減を約束した国際条約ですが、これを読み込んで行く中で、気候変動、地球温暖化を抑制していかないといけないということを知り、環境問題を深く考えるようになるきっかけとなりました。

そして、35歳で転職を考え、設置しただけでは動いているかどうか判らない太陽光発電の設計 **シミュレーション**※と稼働状態を **モニタリング**※する、環境系のソフトウェア会社に転職をいたしました。理由としては、環境系という専門性のある分野で自分のITの知識を生かせる仕事は面白いのでは?と考えたからで、それは、現

在手掛けております再生可能エネルギー事業との接点となるものでした。

その後、2011年、東日本大震災および福島第一原子力発電所事故をきっかけとして、**再生可能エネルギー**※の世界に関わってきた者として「これは一体何が起きているのか?」と大きな衝撃を受けました。私はそれまでは、原発に対してYESでもNOでもないノンポリティカルな立場でしたが、東日本大震災では、福島第一原子力発電所のように1~3号機が連続爆発、相次いでメルトダウンし、もし4号機まで爆発していたら、福島第二原子力発電所、女川原子力発電所でも深刻な事故が連鎖的破局的に起こり得た可能性もあったのです。後に吉田所長が「東日本一帯が壊滅すると思った」と打ち明けるほどの最悪のシナリオ寸前までいったのですから、そんなこと原発以外であり得ますか?このような過酷事故発生の可能性に加えて、他にも高濃度放射性廃棄物の処理問題も大きく、私は原発のことを調べていくうちに、これはこのままにしておいていいのか?と強く感じるようになりました。

そして再生可能エネルギーに関わってきた者の「生きた証」として、残りの人生を考えたうえで、41歳で会社を辞め、2011年10月に「少しでも原発に依存しない社会を!」という強い気持ちから「**(株)インテグリティエナジー**」を創業し、再生可能エネルギーの事業を立ち上げました。丁度その頃、運がいいことに、国として原発や化石燃料による火力発電に依存せず、地域の各エネルギーシステムを作って行くという気運の高まりを背景として、再生可能エネルギーを「国民負担で育てて行きましょう」という **FIT制度**※が2012年7月から始まり、国の後押しを受けるかたちで太陽光発電をやってみようかという事業者が増えてきました。私は今までの経験から「太陽光発電システムの設計、シミュレーション、モニタリング」が出来ましたので、太陽光発電をはじめとした地域資源活用型再生可能エネルギー事業を進めて、地域社会の持続的発展の為に尽力しようと決意を新たにいたしました。

☆事業内容と目標

その頃、創業後に入会した北大阪商工会議所の青年部の先輩方との繋がりで、起業して初めて地元枚方市尊延寺に1,000kWのメガソーラーシステム(2013年運転開始)を設置、稼働させることができました。その1年前の2012年には出身地でもある香川県高松市に地域資本共同出資型の再生可能エネルギー発電事業(うどん県電力(株))を創業し、太陽光発電所を稼働させています。現在では、地域に根差した太陽光発電事業会社として県内トップクラスの施工実績を誇ります。

また、木質 **バイオマス**※発電事業として、妻の出身地でもある三重県松阪市内の林業関係者6社(三重エネウッド(株))による、三重県産未利用間伐材を主原料にし

た出力5,800 kW規模の木質バイオマス発電所(2014年運転開始/1号機)の立ち上げに関わり、ノウハウを学びました。この事業では、未利用材を燃料とすることで、県内林業の活性化と雇用確保等で地域経済の活性化を図ることを目指しています。

そして、同じく三重県松阪市に2015年に三重エネウッド(株)創業者と共に、「バイオマスパワーテクノロジー(株)」を創業、代表取締役役に就任いたしました。これは、既設発電所向けの未利用材燃料保管およびチップ生産時に大量に発生する処理困難材(バーク)を積極的に活用して発電利用に回すという、先駆的事例(木質バイオマス発電所2号機)となるビジネスです。

さらに、2020年度には、老舗林業会社である「(株)玉木材」(奈良県五條市)を第三者承継、2021年には、「パワーエイド三重合同会社」を創業。FIT制度に頼らない木材・製造業生産副産物を燃料とする「パワーエイド三重シン・バイオマス®松阪発電所」(2025年3月商業運転開始)を建設・運営し、新たな脱炭素電源開発事業として進めております。これは、「FITのような国民負担に依存しない発電事業を立ち上げられないものか」と考えていた頃、きのこ生産・販売大手のホクト(株)より、三重きのこセンターから1日50～60トン排出される大量の廃菌床を燃料として活用できないか打診を受け、燃焼試験を実施した結果の設立でした。ホクト社の廃菌床、近隣から排出されるリサイクル木材チップ、RPF(廃プラスチック)などを混焼して発電するもので、つくった電気はホクト三重きのこセンターに全量販売するというサーキュラーエコノミーモデルです。当社では、この地域資源循環型の仕組みを「シン・バイオマス®」と定義し、商標登録も取得しています。これからは全国に広げ、日本全体の脱炭素化に貢献してまいります。

※シミュレーション(発電予測・設計支援)とは⇒設置前や設計段階で、こういった条件下でどのくらいの発電が見込めるかを試算することです。

※モニタリング(監視・管理)とは⇒太陽光発電設備の運用状況をリアルタイムでチェックすることを指します。

※再生可能エネルギーとは⇒太陽光や水力、風力のように自然界に存在し、繰り返し利用できるエネルギー源のことです。化石燃料(石油・石炭・天然ガス)のように枯渇する心配がなく、環境負荷が少ないことが特徴です。

※FIT制度とは⇒「再生可能エネルギーの固定価格買取制度」のことであり、「太陽光」「風力」「水力」「地熱」「バイオマス」のいずれかによる再生可能エネルギーで発電した電気を、電力会社が一定価格で一定期間買い取ることを国が約束する制度です。

※バイオマスとは⇒生物資源(bio)の量(mass)を意味しており、再生可能な生物由来の有機性資源(化石

プロフィール

【生年月日】

1970年1月 55歳 水瓶座 戌年

【血液型】B型

【趣味】キックボクシング

【個人的な信条、座右の銘】

中国の古典『論語』「義を見てせざるは勇無きなり(ぎをみてせざるはゆうなきなり)」「正義と知りながら行動しないのは、勇気がないのと同じだ」という意味。「義(ぎ)」とは、人として当然なすべき正しい行いのこと、事が起きた時に勇気をもって取り組める人間。

【尊敬される人物】

児玉源太郎(こだま げんたろう)氏。日露戦争で極めて重要な役割を果たした日本陸軍の軍人であり、政治家
稲盛和夫(いなもり かずお)氏。日本を代表する実業家であり、経営哲学者。

諸葛孔明(しょかつ りょう こうめい)氏。中国三国時代の蜀(しょく)を支えた伝説的な軍師・政治家・発明家。

【簡単な経歴】

高校まで香川県。高松市にある高松高校(国民民主党の玉木首と同級生)を経て慶応義塾大学へ。高校・大学は応援部に所属。

【家族】妻 娘1人(大学院2年)



資源を除く) のことです。バイオマスは成長の過程で大気からCO₂を吸収して固定化したものであることから、バイオマスを燃料として燃焼させても、大気中のCO₂濃度を増加させない「カーボンニュートラル」な特性を持っています。バイオマスの具体例として、木くずや農産副産物、食品残渣、し尿が挙げられます。このバイオマスの中でも木質由来のものを「木質バイオマス」と言います。



枚方市尊延寺メガソーラーシステム

*インタビューの感想

「今日は宜しく願いいたします。」のご挨拶に始まりましたが、直ぐに「北角氏ワールド」に引き込まれる程、流れるようにお話をしていただき、事業を起業されるに至った経緯や、これからの活動への熱い思いをお聞きすることが出来ました。社長ご自身が大切にされている「義」という言葉通りに、これから先も様々な困難にぶつかろうとも、努力して前に進んで行かれることと強く感じました。